

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380436

研究課題名(和文)「大同生命文書」の総合的研究 リレーションシップバンキングの系譜

研究課題名(英文) Comprehensive study of "Daido Seimei Monjo" : Genealogy of Relationship Banking

研究代表者

結城 武延 (Yuki, Takenobu)

東北大学・経済学研究科・准教授

研究者番号：80613679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：近世：大名貸しがビジネスを行うにあたって、その外的環境である金融政策に反応して資本市場が機能していたことを計量的に明らかにした。具体的には幕府の米価政策に対して市場参加者が合理的に反応していたことを示した。近代：近代以降の広岡家は保険業と金融業を主軸とした金融ビジネスを展開させた。昭和金融恐慌によって、広岡家は銀行業を清算せざるを得なかった。そこで、広岡家は家産を売却し外部の資金提供者に一切迷惑をかけない形で問題を処理し、広岡家の信用を何とか維持し続けた。そして一家一業主義で生命保険に特化することで、財閥系金融機関による資本集中の流れの中で、生き残りを図ったのである。

研究成果の概要(英文)：Early Modern: We revealed quantitatively that the capital market was functioning in response to monetary policy. Specifically, We showed that market participants were reasonably reacting to the rice price policy of the Shogunate.
Modern: Hirooka family deployed various financial businesses in Modern Japan. By Showa financial crisis, the Hiraoka family was obliged to liquidate the bank. Hiraoka family sold their assets and handled the problem without harming external funders. With such a financial strategy of the Hirooka family, their credibility was maintained. After that, they tried to survive in the financial industry by specializing in life insurance.

研究分野：経済史、経営史

キーワード：日本経済史 日本経営史 金融史

1. 研究開始当初の背景

金融市場における取引は、市場ベースの金融取引 (arms-length financing) と関係的融資 (relationship financing/banking) とに大別される。これらは二律背反の関係にあるのではなく、これらを両極とする多様な組み合わせの中から、最適な金融契約が結ばれる (Aoki[2001])。ここで金融契約の有り様を決定的に左右するのは、(1) 契約の執行を保障するメカニズム、および (2) 貸し手と借り手の間に存在する情報非対称の度合い、の2点である。

(1) 金融契約の執行を保障する公的な統治システムが存在する場合、市場ベースの金融取引がその威力をいかに発揮する。資金を必要とする者は、市場において匿名的な資金を集め、資金提供者は、匿名的にその資金を運用する。社債や株式の発行に代表される、これら匿名的な金融契約が、資本主義経済を支える金融取引として一般にイメージされるものであろう。

では、近代的な司法が整備されていたはずの戦後の日本経済において、関係的融資が重要な意味を持ったのはなぜであろうか。この点については、戦時統制期にその源流を求める研究 (岡崎・奥野[1993]) や、国際金融市場における資金調達規制されていたという制度的要因を指摘する研究 (Hoshi and Kashyap[2001]) が説明を与えている。

しかし、関係的融資が、江戸時代において大名と両替商との間で行われていたという事実 (森[1970]、高槻[2012])、明治時代の企業勃興期においても都市部・地方双方で広汎に見られたという事実 (中村[2010]、石井[1999])、メインバンク制が崩壊したと言われて久しい現代にあっても行われている事実 (Ogura and Yamori[2010]) をふまれば、関係的融資を、特殊な時代 (高度成長期) に見られた特殊なシステム (メインバンク制) として捉えるのみでは不十分である。その成立から定着に至るまでを時代横断的に見通した時、より豊かな日本経済史像、金融史像を構築できるのではないか。この問題意識が、本研究プロジェクトを考案した学術的背景である。

この問題に接近する上で我々が着目したいのは、上記の (2)、すなわち、貸し手と借り手の間に存在する情報非対称である。Dixit[2004]が理論的見通しを与えた通り、たとえ公的な統治システムが構築されていても、市場の発展度合いとその市場における参加者・集団の大きさによっては、関係的融資が優位な金融取引として選好される状況は生じ得る。そして、こうした状況は時間と共に変化する。言い換えれば、市場を取り巻く制度的環境は、市場の発展や技術的变化によって内生的に変化する。ある制度が、なぜその国、およびその時代に成立し得たのかについては、歴史的な脈をふまえなければ解明できないということは、歴史制度分析におい

て強調されてきた点である (Grief[2006])。したがって、関係的融資の成立と展開の過程を考察するためには、市場はもとより、市場を取り巻く環境の通時的な変化を観察することが不可避の課題となる。

では、そうした観察を可能にする素材は、歴史的資料の中に求められるのだろうか。戦後日本のメインバンク制を分析した研究者は、貸し手と借り手の間の交渉過程にはついで踏み込めなかった。なぜなら、それは貸し手である金融機関にとっても、借り手である企業にとっても機密事項に属する事柄だからである。それゆえ、Aoki[2001]に代表されるような精緻な理論的分析は発達したものの、実態への肉薄という意味では迫力を欠いていた。この間隙を埋める歴史的資料こそが本研究プロジェクトで用いる「大同生命文書」である。

2. 研究の目的

現代に至るまで、我が国の経済において重要な役割を果たし続けてきた関係的融資 (relationship banking) の形成と展開の過程を、これまで本格的に分析されることなかった新素材である「大同生命文書」を用いて解明することが本研究の目的である。

匿名的な証券・金融市場が高度に発達した現代においても、企業・銀行間では関係的融資が広汎に行われている。こうした慣行は江戸時代の大名金融市場において形成され、明治以降の産業革命の過程において定着を見せる。江戸時代大坂の豪商・加島屋久右衛門、その後身である加島銀行と大同生命の経営資料を網羅する「大同生命文書」は、我が国における関係的融資慣行の成立過程を考察する上で好適な素材であり、時代横断的にこれを分析することが求められる。

「大同生命文書」は、大同生命保険株式会社 (以下、大同生命) の創業一族である広岡家に関する資料、ならびに江戸時代大坂の両替商、加島屋 (広岡) 久右衛門 (以下、加久) 1888年設立の加島銀行、1902年設立の大同生命保険相互会社に至るまでの経営・家政資料、約2,500点の総称である。2012年に迎えた大同生命の創業110周年を機に展開する記念事業の一環として、文書を長く後世に伝え、以て広く学術研究に資することを目的として、2011年12月27日、大阪大学経済学部 (以下、大阪大学) に寄託されたものである。

研究代表者と分担者は、連携研究者の沢井実氏の協力を仰ぎながら、この整理作業に従事し、2013年夏、資料目録の完成を見た。文書は2013年8月より一般に公開されているが、未だ本格的検討は加えられておらず、これまでも『大同生命70年史』、『大阪市史料』など、ごく少数の文献において参照されるにとどまっていた。分析を本格的に進める素地が調った今、まず着手すべきと考えているのは、加久、および加島銀行によって実

施された関係的融資の実態解明である。

「大同生命文書」に含まれる加久、加島銀行の経営資料には、関係的融資の実態を示す史料が多く残されている。江戸時代において加久が融資を行った大名は100藩近くに上るが、その内、特に深い関係を結んだことが「大同生命文書」から窺えるのが、萩藩、津和野藩、中津藩である。ここでは、加久とこれらの藩との間で結ばれた金融契約を、契約書面のみならず、その交渉過程にも踏み込んで分析する。明治以降においては、加島銀行と大同生命保険の営業報告書及び財産目録などが数多く残っており、当時の銀行業と保険業が関連会社であった場合における経営の全貌が明るみになる。加島銀行は昭和金融恐慌によって廃業するが(1937年)昭和金融恐慌後に日本銀行・政府が銀行救済のために行った諸政策について、銀行側がどう対応していったのかを、当時の取締役会議事録などから詳細に分析する。くわえて、廃業に至った過程や廃業後の清算過程についても、債権者及び株主への対応に焦点をあてて検討する。

3. 研究の方法

「大同生命文書」の整理は完結しているとはいえ、その内容の読解は着手できていない部分も多い。関係的融資の実態把握を目標に掲げる本研究課題において、史料の丹念な読解は生命線となるため、初年度は、近世の加久、近代の加島銀行それぞれについて、経営史料の読解に全力を注いだ。

具体的には以下の史料群の読解を検討している。

【近世・加島屋久右衛門史料】

- (1) 諸大名との間に取り交わした融資契約関連史料(萩藩、津和野藩など)
- (2) 加島屋五兵衛家(加久の分家)の決算史料(約50点)

以上の史料は、加久、およびその分家の五兵衛家について、各大名との関係的融資契約の実態を伝えるものである。萩藩について言えば、加久は萩藩の「大坂蔵屋敷留主居格」として、同藩の大坂での資金調達をアレンジする職務についていたが、その職務内容を明らかにすることで、近世大坂における関係的融資の実態がかなりの程度、明らかになると期待される。また、津和野藩については、同藩の収入と支出のほぼ全てを加久が掌握するレベルでの包括的財務契約を交わしているため、近世期の関係的融資慣行の一側面を伝大名と加久が結んだ関係的融資を観察する上では、大名側の史料からの接近も不可欠であるため、「大同生命文書」と併せて活用する予定であるとした。

【近世・鴻池善右衛門家文書(大阪大学) 加島屋長田家文書(国文学研究資料館)】

加久と同業にあった大坂の両替商、鴻池屋善

右衛門、および加島屋作兵衛についても、豊富な史料が残されている。これらも比較対象素材として大変有益であるため、適宜参照した。

【近代・加島銀行史料】

- (1) 債権明細書及び担保・抵当権に関する明細書
 - (2) 昭和金融恐慌期における取締役会決議録
 - (3) 昭和金融発生時前後の営業報告書及び破綻後の清算報告書
- (1)より加島銀行における貸出状況とその条件が網羅的に把握した。(2)より金融恐慌期に銀行が具体的にどのような意思決定を行ったのか、とりわけ、日本銀行の諸政策への対応が詳細に記述されている点が、銀行側からみた昭和金融恐慌の実態を明らかにした。さらに、(3)によって昭和金融恐慌の先行研究にはなかった破綻後の清算過程について分析を行った。

以上の史料について、結城・高槻がそれぞれ読み進めた成果を、定例研究会にて共有し、それぞれの史料読解と分析を深めた。

4. 研究成果

近世：加島屋をはじめとして大名貸しがビジネスを行うにあたって、その外的環境である金融政策に反応して資本市場が機能していたことを計量的に明らかにした(Yasuo Takatsuki 2016)。具体的には幕府の米価政策に対して市場参加者が合理的に反応していたことを示した。以上のような米価政策と市場の対応関係を示すためには、正確な米価情報の構築が必要不可欠である。そこで、当時の暦と季節をふまえた「米年度」を提起して米価系列を再構築し、従来の年次平均よりも実態に即した年次平均となることが明らかになった(高槻[2016])。

また熊本藩を事例として、幕府のご用命について、実際の財政は健全にもかかわらず、あえて財政事情が厳しい旨を訴えることで、幕府との交渉条件を有利に進めていった過程も明らかにした(高槻[2015])。藩の財政状態の健全性を明らかにすることは金利引下げ効果や米価上昇効果をもたらすため資金調達の面で有利に働く。他方、幕府のご用命を受ける可能性も高まるため、双方を考慮した上で財政状態の表明を決定していたのである。

近代：近代以降の廣岡家は保険業と金融業を主軸とした金融ビジネスを展開させた。その中でも大同生命保険会社「株主総会議事録」と「取締役会議事録」を史料として、廣岡家がどのようにビジネスに関わっていたのかを明らかにした(結城[2015])。具体的には、株主総会では積極的に情報公開することで、被保険者と株主の利害対立を緩和させるように総会運営を行ったのである。

近世以来の大名貸として資本力と信用を背景に、近代以降は総合的な金融ビジネスを展開し、広岡家は急成長する。加島屋商店からの子飼いや番頭を軸に幹部を形成し、広岡家でまとまることで組織内の利害対立や意思決定の不統一も少なく、経営を行うことができた。

他方、その他財閥系は初期の時点で積極的な学卒採用と専門経営者の雇用を行っており、彼らによる組織運営によって景気の浮沈に関わらず拡大を続けた。こうした広岡家の組織運営と人材育成の立ち遅れが拡張期そして金融恐慌期の足枷となつて、銀行の破綻と組織再編の一因となった。

広岡家は家産を売却し外部の資金提供者に一切迷惑をかけない形で問題を処理し、広岡家の信用を何とか維持し続けた。そして一家一業主義で生命保険に特化することで、財閥系金融機関による資本集中の流れの中で、生き残りを図つたのである（結城 [2016]）。

【参考文献】

石井寛治『近代日本金融史序説』東京大学出版会、1999年。

石井寛治『経済発展と両替商金融』有斐閣、2007年。

岡崎哲二・奥野正寛『現代日本経済システムの源流』日本経済新聞社、1993年。

高槻泰郎「幕藩領主と大坂金融市場」『歴史学研究』第898号、2012年10月、68-77頁。

中村尚史『地方からの産業革命』名古屋大学出版会、2010年。

森泰博『大名金融史論』大原新生社、1970年。

Aoki Masahiko, *Toward a Comparative Institutional Analysis*, Cambridge, MA, The MIT Press, 2001.

Dixit, Avinash K., *Lawlessness and Economics: Alternative Modes of Governance (The Gorman Lectures in Economics)*, Princeton University Press, 2004.

Greif, Avner, *Institutions and the Path to the Modern Economy: Lessons from Medieval Trade (Political Economy of Institutions and Decisions)*, Cambridge University Press, 2006.

Hoshi, Takeo and Kashyap, Anil, *Corporate Financing and Governance in Japan: The Road to the Future*, MIT Press, 2001.

Ogura, Yoshiaki and Yamori, Nobuyoshi "Lending Competition and Relationship Banking: Evidence from Japan", *International Journal of Business*, vol.15, No.4, pp.377-393, 2010.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

高槻泰郎、近世大坂米価の再検討 「米年

度」概念の提起、*経済史研究*、査読無、19巻、2016、25-39

〔学会発表〕(計3件)

Takeshi Abe, Izumi Shirai and Takenobu Yuki, "From Feudal Lords to Noblemen: investments by the former daimyō in Meiji Japan", 20th Annual Congress of the European Business History Association 2016 / 1st World Congress on Business History Session F04: A Cross-border Elite: Nobility and Business (organized by Silvia A. CONCA MESSINA, Takeshi ABE), 2016年8月27日、ノルウェー(ベルゲン)

結城武延、「恐慌と銀行破綻 昭和恐慌における加島銀行の事例」、*経営史学会関西支部会*、2016年8月5日、*阪南大学あべのハルカスキャンパス(大阪・大阪市)*

Yasuo Takatsuki, "Property Rights Protection in 18th century Japan Revisited: the Case of Rice-Backed Security Exchange Market." *World Economic History Congress in Kyoto*, 2015年8月5日、*国際会館(京都・京都市)*

〔図書〕(計2件)

藤田覚編、吉川弘文館、『幕藩制国家の政治構造』、高槻泰郎「金納御手伝普請にみる幕藩関係 寛政度御所造営に関わる熊本藩上納金を素材に」、2016、126-152ページ

田中亘 / 中林真幸編、有斐閣、『企業統治の法と経済』、結城武延「近代日本における株主総会と取締役会 3 社合併による大同生命設立からオーナー企業へ」、2015、155-185ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

結城 武延 (Yuki, Takenobu)

東北大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号：80613679

(2) 研究分担者

高槻 泰郎 (Takatsuki, Yasuo)

神戸大学・経済経営研究所・准教授
研究者番号：70583798

(3) 連携研究者

沢井 実 (Sawai, Minoru)

南山大学・経営学部・教授
研究者番号：90162536

宮本 又郎 (Miyamoto, Matao)

大阪大学・大学院経済学研究科・名誉教授
研究者番号：50030672